

3 ヨコバイ（サカキ害虫）の被害及び発消長の調査

（県単：R1（2019）～）

森口 辰也

はじめに

近年、県内のサカキ生産地で葉に白点が無数に生じる被害が発生し続けている。（写真－1）被害に起因する害虫を捕獲し、九州大学に同定を依頼したところ、原因は他県でも被害が発生しているオビヒメヨコバイ属の新種と同定された（以下、「ヨコバイ」という。）。なお、このヨコバイは標準和名をサカキブチヒメヨコバイ（学名：*Stictotettix cleyarae*）と命名された（紙谷ら2020）。

白点が発生したサカキは商品価値が低下することから、適切な防除が必要となる。ヨコバイの生態や薬剤試験については他県において既報の成果があるものの、佐賀県における被害の実態を把握することで効果的な防除に寄与することを目的として、県内のヨコバイの発消長及び被害状況を調査した。



写真－1 サカキブチヒメヨコバイによる吸汁被害（白点被害）

項目1：発消長調査

1 調査方法

試験地において、年間を通じた発消長の調査を実施した。調査方法としては、異なる供試木の高さ0.5m程度に両面の黄色粘着トラップ（高性能粘着式捕虫シート もりの捕虫シート（森産業株式会社製）を幅10cm、長さ23.3cmに切断したもの）を設置した。（写真－2）調査地は薬剤散布を実施していない無処理地区であり、6枚の黄色粘着トラップを設置し、トラップによる成虫の捕獲頭数を成虫発生数の指標とした。黄色粘着トラップの交換は、4月から3月までの間、概ね15日毎に実施し、各月前半・後半の捕虫数を調査した。



写真－2 黄色粘着トラップ設置状況

2 結果及び考察

調査地の成虫捕獲頭数を図-1に示す。最も捕獲数頭数が多かったのは4月20日～5月8日の422頭、次いで10月6日～10月23日の350頭であった。春～初夏にかけては個体数が増加し、秋に再び個体数が増加することから、気温が高い夏季は個体数が落ち着き、比較的涼しい時期に個体数が増加するものと推察される。冬期については、例年より平均気温が高かった2月については、成虫捕獲頭数が一時的に増える結果となった。越冬した成虫若しくはその次世代の成虫が春～初夏にかけて個体数を急増させている可能性が高いため、春先の薬剤散布を最優先とし、秋の薬剤散布も効果的であると考えられる。

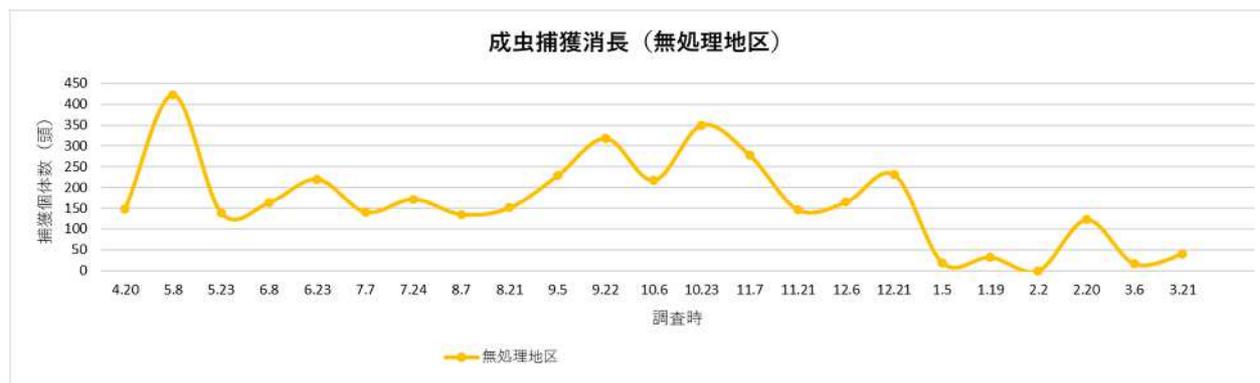


図-1 成虫捕獲消長

項目2：被害状況調査

1 調査方法

試験地(表-1)で令和5年度に展開した葉(以下、「新葉」という。)の被害の進行状況の調査を行った。調査は、立木6本を選定し、それぞれ約0.5m高、約1.0m高、約1.5m高の枝を1つずつ選び、新葉の数とその内被害にあった葉数を毎月1回実施した。試験地では、昨年度のヨコバイ成虫の発消長調査結果をもとに、登録農薬粒剤を4月中旬、5月下旬、10月上旬の3回調査木の根元回りに散布し(写真-3、4)、粒剤を散布した調査木と無処理の調査木について、被害率を調査した。

表-1 試験対象詳細

試験地	佐賀県三養基郡基山町	枝高(m) 調査葉数(枚)	
標高	約170m	新葉	0.5 101
栽培環境	ヒノキ人工林内		1.0 242
調査対象木	6本		1.5 372
平均樹高	4.66m		
平均胸高直径	4.28cm		



写真-3 登録農薬粒剤



写真-4 粒剤散布状況

2 結果及び考察

図-1に粒剤散布処理した調査木の新葉被害率の推移、図-2に無処理調査木の新葉被害率の推移を示す。被害率は被害葉数の合計を調査対象葉数の合計で除したものとした。粒剤を散布した調査木と無処理の木のいずれについても、継続的に被害率が上昇し、高さ 0.5mは 40%程度、1.0m及び1.5mは 60%程度まで上昇した。両者の最終的な被害率には大きな差は認められなかった。その要因としては、現地栽培地のサカキは断幹作業を施しておらず、樹高が 4.0mを超えており、根が地表深くに張り出していることから、吸収根から雨水等により浸透した粒剤の有効成分を十分に吸い上げきれなかった可能性が考えられる。

白点被害を抑制し、商品価値が低下していないサカキを生産していくためには、新葉の被害を抑えこむことが重要である。今後の課題として、効果的な薬剤散布のために必要なヨコバイの発生消長をある程度把握できたため、害虫に直接噴霧する乳剤等を用いて防除試験を進める必要があると考える。

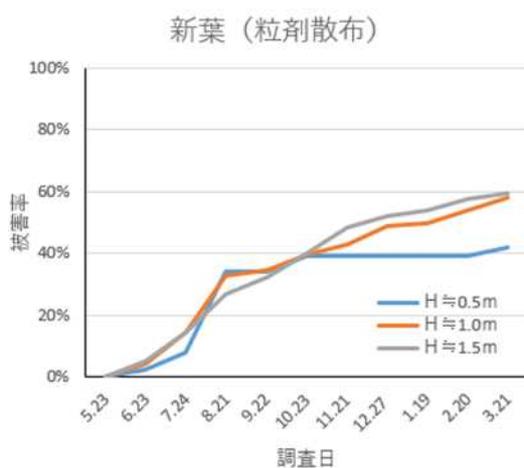


図-1 新葉の被害率の推移 (粒剤散布)

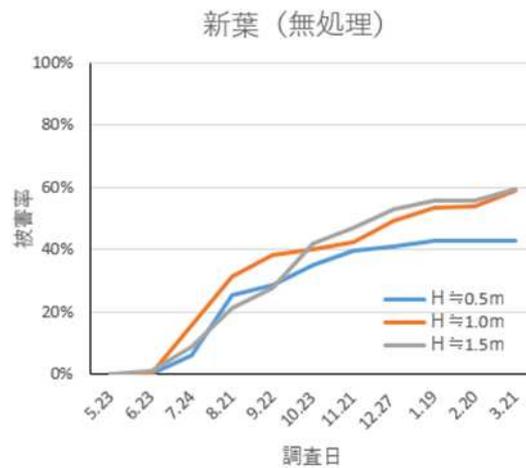


図-2 新葉の被害率の推移 (無処理)